



Title	看護を通して世界で働く
Author(s)	谷水, 亜衣
Citation	目で見えるWHO. 2023, 84, p. 22-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92356
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

看護を通して世界で働く



世界保健機関南東アジア地域事務局(WHO SEARO)
Technical Officer – Nursing and Midwifery

谷水 亜衣

カナダ・オンタリオ州の看護師免許を取得。カナダ・トロント大学大学院看護学研究科修士課程修了。3カ国で勤務経験を経て、2018年よりWHOへ入職。

初めまして。私は、看護と助産の行政官としてインド・ニューデリーにあるWHO 南東アジア地域事務局 (SEARO) で、2年ほど前から勤務しています。インドの前は Junior Professional Officer (JPO) として WHO バングラデシュ国事務所に2.5年看護と助産の行政官として勤めていました。

職務内容・役割

私は現在、ユニバーサルヘルスカバレッジ (UHC) や持続可能な開発目標 (SDGs) を WHO 南東アジア事務局の11加盟国が達成できるよう、看護・助産の質の向上に携わるお仕事をしています。南東アジアの中でも医師一人に対して看護師が5~6人いるインドネシアもあれば、医師一人に対し看護師が一人にも満たないバングラデシュもあります。ほとんどの国では8割以上の看護師が女性ですが、東ティモールでは女性看護師が3~4割程度です。

主に、教育・雇用・リーダーシップ・臨床の質を向上できるよう、データ収集と分析、エビデンス作り、ツール作りを行い、看護と助産のグローバル戦略の方向性 2021-2025 (Global Strategic Directions for Nursing and Midwifery 2021-2025) と南東アジアの助産戦略の方向性 2020 - 2024 (Regional Strategic Directions for Strengthening Midwifery in the South-East Asia Region 2020-2024) に記載されているような政策形成を行っています。

私は幼い時から看護師として日本国外で活躍したいと夢見ていましたが、WHO に勤める前には、3カ国で看護関係の仕事をしていました。日本で生まれ育ち、テレビで見る日本以外の世界を実感したく、大学留学をきっかけにカナダに移りました。カナダの多国籍な街トロントで数年、臨床看護師として働いているときに、カナダは生活しやすい国だが、自分は世界のほんの少ししかかじっていないと感じ、日本とカナダとは違う別世界に行き、もっと世界を見たいと思い、ボランティアなどで発展途上国に行きたいと思いました。看護を通して世界を見たいと思っている最中、勤めていた病院が中東の病院と提携することになり、クウェートとカタールの国立がんセンター向上プロジェクトに携わりました。その他、クウェート初の乳がん早期検査クリニックのデータベースを作成し、データ

の分析や、カタール初のがん患者教育講習の計画と実行、カナダのがんセンターでの婦人科がん患者における悪性腸閉塞のケアの最適化、リンパ浮腫クリニックでの治療から訪問看護の紹介プロセスの開発など、クリニックのシステム改善プロジェクトに携わりました。各国から派遣された経験豊富なプロフェッショナルと共に、様々な視点・角度から国々の独特な医療制度や環境を観察し、その国や文化に合致する方法を考えるのが新鮮でした。

クウェートでそのようなプロジェクトで働いていたところ、数ヶ月共に働いていたカナダ人の看護師が、「博士号を取って将来 WHO や国際機関で働きたい」という夢を、私に話してくれました。そのことがきっかけで、今まで考えてもいなかった国際機関に興味を持つようになりました。WHO の憲章にある「健康は



JPO合格後、ジュネーブ国連オフィスを訪問
(自分が国連の一員になったと認識、実感できた時です)



バングラデシュ・コックスバザールでの難民キャンプの中の医療クリニックを訪問時の風景



バングラデシュ国事務所のリトリート・職員交流会での写真

人間の基本的な権利のひとつ」という理念に私は深く共感し、WHO で働きたいと思うようになりました。カタールに住んでいるときにたまたま、ヨルダンにいるシリア難民への「車椅子講座」に講師として参加する機会がありました。「車椅子講座」とは、車椅子生活で気をつけること、体格にあった車椅子選び、褥瘡のケアの仕方などを、車椅子を使用している方々に教えるものです。わたしはヨルダンで、戦争によって体の自由を奪われ、他国から支援された車椅子で生活をするシリア難民と週末を過ごしました。そしてその経験を経て、今後も世界中の人びとのために役立ちたいと思うようになりました。WHO など自分の経験を活かしながらグローバルヘルスに携わりながら、他国へ技術提供や支援を行い、多くの国の看護技術を向上させる手助けをすることを考えました。

私は看護を通して、世界中の「人」と関わってきました。訪ねた場所での人々の日常生活の様子は多様な価値観の存在を認識させてくれました。各国政府機関、国際機関、NGO、医療機関、大学や教育機関、ステークホルダーで勤めているスタッフの様々な文化の違いやコミュニケーションの仕方の違い、それぞれで働いているスタッフの経験を生かしながら共にパートナーシップを組んで一つのチームになり、みんなでゴールを目指して作業する仕事が好きです。WHO で働いていると、職員労働組合 (staff association) といって職員の声を聞き、職員が働きやすいように幹部や組織に標

榜する職員会などがありますが、その他にも、性的搾取や虐待に関する諮問委員会などの職員会に参加できます。こう言った内部職員会には、自ら立候補したり、他者に推薦されたりして参加します。こういった職員会に参加することで、今まで知らなかった職員 (特に普段交流のない他のオフィスの現地採用の管理職 (G) や幹部職のディレクターレベルのスタッフ (D)) と仕事することもでき、また新たなチームを作る手助けになります。

不慣れな環境の中、新しい街で生活をするたび、「あの国では xx をチャレンジしたな」など「あそこで xx を習ったなあ」と思い出を作りながら、新しいことを取り込むようにしています。WHO での勤務を通して、いろんな国で住め、色んな文化を知り、趣味を増やすことができ、ありがたく思っています。

従来の WHO の働き方の多くは、エキスパートレベルになってから WHO に就職し、定年まで働くというものでした。しかし最近では、メンターシッププログラムがスタートされ、若手のうちから入職しても、内部で育成され、キャリアを積みやすいような組織になっていると個人的に思っています。また、WHO で従事する課題には、様々ありますが、看護師だからといって、看護関係の課題にしか取り組めないわけではありません。私は現在、たまたま看護と助産に直接携わる仕事をしていますが、例えば UHC のための保健システム向上に貢献したり、非感染症疾患 (NCD)、プライマリーヘ

ルスケアや気候変動などの課題にも取り組んだりできるのです。私はこのような点で、WHO に働きがいを感じており、今後も WHO でいろいろ学びたいと思っています。近年、WHO 組織内での「DEI」の取り組みに参加しています。DEI とはダイバーシティ (多様性)、エクイティ (公正)、インクルージョン (包摂) を伴った働き方改善のことで、WHO で働きやすいような環境作り、主にカルチャーチェンジに携わっています。今後の WHO での社内、組織内での働き方を変えられるかもしれないワークフォースの一員として、貢献したいと思っています。

将来 WHO を目指す人へ

これは WHO だけではないですが、キャリアを積むにあたり、メンターをつけることをお勧めします。私の場合、仕事内容によりメンターが変わってききましたが、今まで数々のメンターにお世話になり、いろんな面で助けてもらえました。難しい課題や難しい人間関係の話、今後のキャリアプランニング、人生相談、女性としての働き方など、自分では考えもつかなかったことを教えてもらったことや、自分の興味のある仕事に関わっている人を紹介してもらったことがあります。メンターのおかげで、ネットワークも広がりました。悩むことは多いと思いますが、こういった先輩方のお陰で、違う世界に足を踏み入れる機会を得たり、今までとは違う体験ができたり、助かったりしています。